

# 多様な個性をつなぐ生徒主体の探究を軸に “ともによき世を創る”人材を育成

## 長崎東中学校・高校 (長崎・県立)

学校の礎となっている「ともによき世を創る」の言葉を大切にし、生徒が自走する探究活動を、一般教科も巻き込みながら推進する長崎東中学校・高校。生徒は、多様な個性をもつ仲間と社会課題解決に取り組むなかで、大きく成長しています。

取材・文／藤崎雅子

### 実践のKeyword

🔍 総合的な探究の時間 🔍 SDGs 🔍 文理融合型の探究 🔍 高校生国際平和会議  
🔍 探究ピア・サポート 🔍 ルーブリック 🔍 探究を軸にした授業改善

### SDGsの視点を取り入れ グローバル探究を全校に拡大

長崎東高校は2015年度、普通科に加えて国際科を設置して以来、グローバル教育が大きな特色だ。同年にスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、国際科を対象に課題解決学習を導入するとともに、普通科も含めた海外研修や国際交流の拡充などに力を入れてきた。同校は併設型中高一貫校で、久保田幸成教頭は「中学・高校のいずれも国際交流や社会課題に関心の高い生徒が多い」と話す。

そんな同校が20年度、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業の開発拠点校となった。対象を普通科にも拡大し、SDGsの視点を取り入れた文理融合型の探究活動など、新たな取組を進めている。同事業の目標は、「世界の平和と共生」に貢献するインベティブなグローバル人材の育成。「世界の平和と共生」という文言には、同校の歴史のなかで大切にされてきた「ともによき世を創る」という方針と、非核平和都市長崎にある学校としての思いが込められている。

また、育成したい資質・能力には「課題発見・解決力」「創造力」「情報分析・活用力」「自己表現力」「協働性」「学が意欲」「地球市民性」を掲げ、「WWL7」と総称している(図1)。これをスクール・ポリシー(育成を目指す資質・能力に関する方針)にも設定。ルーブリックを作成し、

生徒は年3回自己評価を行っている(図2)。

WWL事業の立ち上げは、折しもコロナ禍による混乱期にあたった。WWL推進室長・鳥居正洋先生によると、それがプラスに作用した面もあるようだ。

「教育活動が制限されるなか、今できることをやろうと、分掌を越えて有志の先生方が集まって、WWL7の言語化や評価方法などについて何度も話し合いました。多くの先生方と協働して推進する土台づくりにつながったと思います」

### 「やりたいこと」を軸に 多様性のあるチームをつくる

WWL事業の主要プログラムは、併設中学校から高校までの6年間で展開する探究活動だ(図3)。まず中学校では、長崎市の子どもが小学生のときから学んでいる「平和」をテーマにした調べ学習から入り、徐々にSDGsの枠組みを取り入れて視野を広げていく。

高校では、高校からの入学者も加わり、本格的な生徒主体の探究活動に入る。1学年では、学校設定科目「IGRR」(Integrated Global Research/統合型グローバル探究)において大学教授や企業人の講演などを通じて身につける教養やスキルを基礎とし、総合的な探究の時間でSDGsをテーマにした探究活動にクラス内のチームで取り組む。

「本校の探究活動の根底にあるのは、ともによき世を創ることですから、協働性を重視し、チームでの探究を基本とし



**School Data** ※高校

1948年設立／普通科・国際科  
 生徒数806人(男子399人・女子407人)  
 進路状況(2022年3月卒業生)  
 大学227人・専門学校5人・就職1人・  
 その他28人  
 長崎県長崎市立山5-13-1  
 TEL | 095-826-5281

**Outline**

1948年学制改革により誕生。同校の前身である旧制長崎中学校出身の文学者 山本健吉氏の言葉「ともによき世を創る」を大切に教育活動を展開している。2003年度より併設型中高一貫校。2015年度国際科設置。平成27年度スーパーグローバルハイスクール指定校。令和2年度より「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」開発拠点校。



進路指導部 主任  
細田正俊先生



研修図書部 主任  
黒田佳孝先生



WWL 推進室  
榎本英人先生



WWL 推進室 室長補佐  
一ノ瀬憲二先生



WWL 推進室 室長  
鳥居正洋先生



教頭  
久保田幸成先生

「生徒がやりたいことができる 心理的安全性を確保」

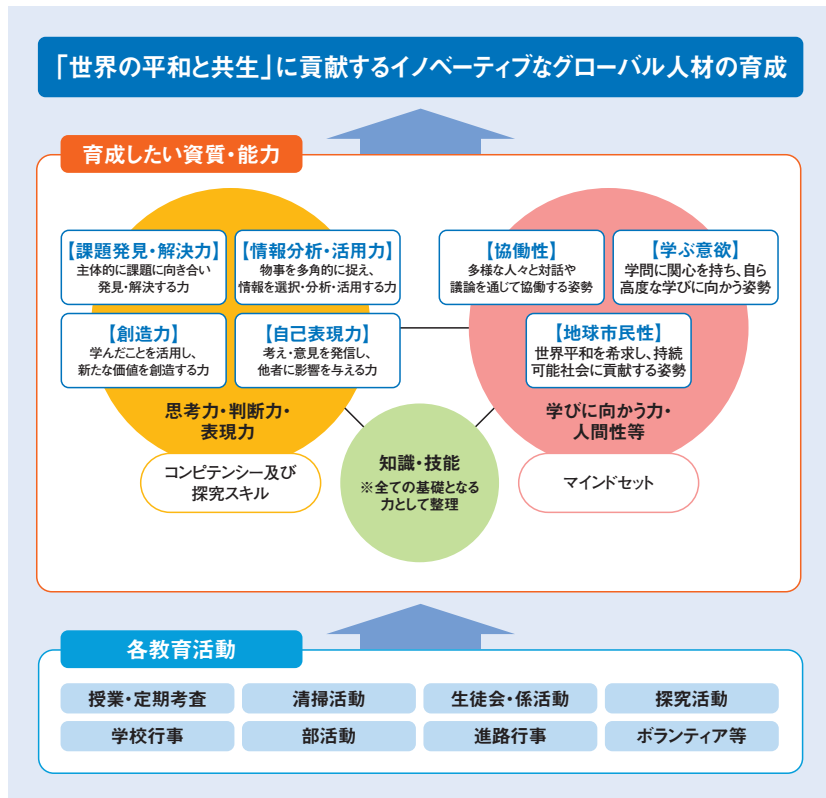
各チームは調査や話し合いを重ね、問いを何度も立て直し、時にはチームを組み替えながら、テーマを深めていく。そのなかで教員はSGH時代から受け継がれる「生徒と一緒に考え、楽しもう」との姿勢で、生徒の自走を促す役割に徹している。生徒からの定期的な報告に対し、論理性や妥当性、使う語句の定義がきちんとなされているかなどの観点を確認するとともに、がんばったことを認めて生徒の意欲を引き出す。WWL推進室の

「社会課題は、1つの専門性だけでなく、いろんな要素を組み合わせて解決していくものです。多様な見方・考え方をもつメンバーの集合知によって、質の高い問いや解決策を生み出す達成感を得てほしいと考えています」(鳥居先生)

「社会課題は、1つの専門性だけでなく、いろんな要素を組み合わせて解決していくものです。多様な見方・考え方をもつメンバーの集合知によって、質の高い問いや解決策を生み出す達成感を得てほしいと考えています」(鳥居先生)

「社会課題は、1つの専門性だけでなく、いろんな要素を組み合わせて解決していくものです。多様な見方・考え方をもつメンバーの集合知によって、質の高い問いや解決策を生み出す達成感を得てほしいと考えています」(鳥居先生)

図1 長崎東高校が目指す人材育成



榎本英人先生はこう語る。「大切にしているのは、とにかく生徒がやりたいことができる環境をつくること。心理的安全性が確保されることで、元から主体的で行動的な生徒たちが、さらに活発になっていきます」

同校の探究活動が目指すのは、課題解決のアイデアを出すだけでなく、社会での実現可能性も踏まえて自ら行動を起こすことだ。そこで、「実社会とつながり、さまざまな大人の価値観に触れる経験が必要」(久保田教頭)と、外部機関と

図2 長崎東ルーブリック ダウンロード可

長崎東ルーブリック【令和4年度】		評価項目				評価者	評価日
学年	活動	S(習得)	A(活用I)	B(活用II)	C(習得)		
1	探究活動						
2	探究活動						
3	探究活動						
4	探究活動						

高校1～3学年を対象に年3回、WWL7(スキル・マインド)についてS(創造)・A(活用I)・B(活用II)・C(習得)の4段階で自己評価する。



2022年度に始めた「探究ピア・サポート」。高校生が中学生の探究活動について指導・助言、激励を行った。



高校生国際平和会議。遠方の高校生とはオンラインで協議し、高校生平和共同宣言の採択に取り組む。



広島平和フィールドワークなど、県内外でフィールドワークを実施。コロナ禍によりオンラインも活用。

の連携を重視。高1・2の学校行事として年2回の「フィールドワークの日」に实地調査やオンラインインタビューを行うほか、各チームは随時、テーマに関連する企業や団体に自らアプローチしてフィールドワークを実施している。そうして生徒中心に切り拓いてきた外部機関との連携数は、この3年間で300以上となった。SGH事業にも携わったWLL推進室長補佐・一ノ瀬憲一先生は、「学校外とのつながりが飛躍的に広がり、それが生徒の活動の社会実装につながっている」との手応えがあるという。

例えば、理系(医歯薬系)2人と文系(経済系)1人が集まって「感染症を予防する製品ができないか」と考えたチームは、化粧品メーカーや医学研究所、大学の経済学部など多様な分野の外部機関の協力を得ながら、成分分析や環境に優しいボトルの選定や口ゴデザインなども自らい行い、感染症予防ハンドケア製品の開発、商品化という社会実装にこぎつけた。そのほか、NPO法人と協働で海洋ごみ削減を啓発する本の作成・出版、原爆を題材に平和を学ぶ教材を作成して国連に持参したなど、多彩な実践例がある。

また、探究成果をもって積極的に各種大会・コンテストに参加。WLL全国高校生フォーラムでの生徒投票賞1位や、日本水産学会主催全国高校生ボスター発表会での最優秀賞の受賞など、数々の評価を得ている。

### 英語が苦手な生徒も活躍する 高校生国際平和会議

高3では、高2の探究活動の個人まとめとして日本語や英語での論文を作成するとともに、国内外の高校生と世界課題について協議する「高校生国際平和会議」を企画・運営する。23年度は7月に、SDGs 17項目を分類した4つの部門別に国際課題について英語と日本語

図3 6年間の体系的な探究活動



の2部門で協議し、「高校生平和共同宣言」を作成して発表するという内容で、国内の高校生だけでなくアメリカやオランダ、中国など全8カ国24校がオンラインで参加する予定だ。

会議内容の設計や他校への広報、当日の運営などは、前年度に希望者によって組織される生徒実行委員会を中心に行う。実行委員に手を挙げた生徒の数は、初回の22年度開催では59人だったが、23年度開催では学年生徒数の約3分の1にあたる88人に増加した。

「参加動機は『得意な英語を活かしたい』『課題解決に強い思いがある』など、さまざま。英語力やテーマに関する知識量など、それぞれの得意を組み合わせて、お互い刺激し合って取り組んでいます(鳥居先生)

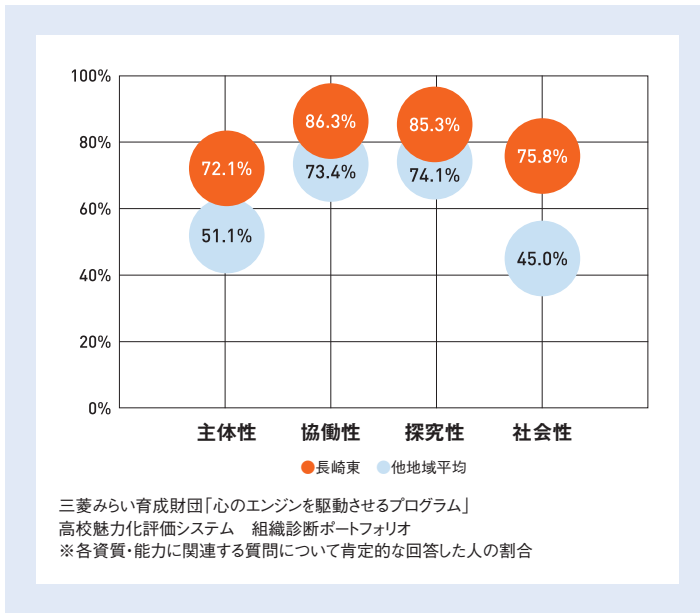
**探究活動の経験を活かして  
授業改善を促進**

こうした一連の探究プログラムが進展するなか、一般教科の授業改善も加速している。

「本校ではSGH事業の一環でいち早くアクティブラーニング型授業に取り組み始めました。一時は停滞もみられましたが、WLL指定を機に探究的な手法を各教科にも活かしていこうという機運が高まり、今、学校を挙げて授業改善に取り組んでいます(研修図書部主任・黒田佳孝先生)

その第一段階として、20年度より1学年の一般教科のなかに「探究ペーシック」の時間を設定。各教科でSDGsを踏ま

図4 生徒の自己評価アンケート



えた授業内容を導入することで、探究活動と教科学習との連動性を高めている。例えば、国語では『羅生門』を通じて貧困問題を考え、化学基礎では化学反応の量的関係と環境問題を考察するといった具合だ。

「探究活動では、教員もわからないことを生徒が自ら獲得し、『先生こうだよ』と教えてくれる。我々教員は、素直に『すごいね』と認めることができる。学びの主役は誰かを認識して謙虚になれる、良い機会だと思います」(鳥居先生)

22年度は、探究をより幅広く日常的な学びに落とし込むことを目指して、探究型授業をテーマに教員研修や公開授業を

実施。教員アンケートでは、「学校全体で授業改善や指導力の向上に取り組んでいる」との回答が100%となった。

「教員が知識や考え方を教え込むのではなく、いかに生徒自身で考えるかを意識している」(進路指導部主任・細田正俊先生)

「教科の面白さや学問に向き合う姿勢も授業のなかで伝えていきたい」(黒田先生)

こうして多くの教員が前向きに授業改善に取り組みながら、総合的な探究の時間の活動に対する理解も広がっているという。

**社会性や主体性に大きな自信をもつように**

では、そのなかで生徒たちはどう成長しているのだろうか。長崎東ルーブリックの22年度自己評価結果を見ると、W・L・7の全項目において5月より12月に上位評価が多く、活動の進行とともに伸びが見られる。特に「協働性」の伸びが顕著で、12月実施時は1学年・2学年ともS評価が35%にのぼった。

また、三菱みらい育成財団の助成事業のなかで実施した生徒の自己評価結果では、「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」のいずれも全国平均を上回っている(図4)。特に「社会性」は全国平均と30ポイント以上、「主体性」は20ポイント以上高い。自ら学校外に飛び出し主体的に活動してきたことで、こうした力に対する自信をつけた様子が見える。

「単に好きだったことも、突き詰めていくことで専門家も認める内容になりえる。元は人前になるタイプではなかった

としても、堂々と自分の考えを発表する力になるようです」(榎本先生)

「入学当初は周囲のレベルの高さに気後れしている生徒もいるのですが、探究活動で自己肯定感を高め、リーダー的存在になる例も少なくありません」(鳥居先生)

**生徒が主役となり自走する学校へ**

3年間のW・L・7事業への取組で、探究活動は着実に軌道に乗ってきた。新年度の課題は、7月に控えた高校生国際平和会議を生徒自身の手で成功させることと探究型授業への改善をさらに進めること、そして、探究活動における生徒の

Interview

多様なタイプのメンバーと海洋ごみ啓発本を発行

2学年の探究活動では、同級生の問題意識に触発されて、一緒に海洋ごみ削減のための活動に取り組みました。まずは海洋ごみ問題の存在を世の中の人に知らせることが大切ではないかと考え、自作の動画のSNS発信や国際会議での発表のほか、海洋教育サポート団体と共に啓発本の制作・発行も行いました。幼稚園の先生が買って読み聞かせをしてくださったなど、反響を聞いてとても嬉しかったです。メンバーの4人は文系・理系が混在していて、思考方法もばらばら。猛進型のメンバーが多いなかで、私はいつも冷静に現実的な意見を出す役割でした。いろんなタイプがごちゃ混ぜだったからこそ、ここまでの活動ができたのかなと思います。(3年生・筑紫莉里花さん/写真右)

本当の謙虚さや行動力が身についた

小さなころから世界を知ることに関心があり、グローバルな取組を行っているこの学校に中学から入学しました。高校では、グローバルな活動や国際交流イベントに積極的に参加しました。なかでも、アジアの高校生とチームを組んで日本の観光プランを練る国際大会に参加したことが印象に残っています。我先に発言する海外の高校生に圧倒されて、それまでの自分が心掛けていた謙虚さはちょっと違うんじゃないか、相手のことも考えたうえで自分の意見をちゃんと言うことが大事ではないか、と気づきました。また、先生方がいつも「なんでもやっちゃえ」と言ってくださることで、前向きな行動力が身についたと思います。(3年生・河原寛太さん/写真左)



筑紫さんが持つのは、探究活動で制作した海洋ごみ問題を考える本。右から開くと小さな子ども向けの絵本、左から開くと自分たちが行った活動の紹介になっている。

自走化の推進だという。生徒の自走化の一施策として、探究ピア・サポートの体系化にも取り組む計画だ。

「昨年、中3の探究活動に助言や激励を行ってくれる高2生を募ったら、中3の生徒数120人を上回る200人が来てくれました。嬉しかったですね。新年度は年度計画にピア・サポートの時間を組み込み、先輩・後輩の関係性も活かして生徒の自走化をさらに進めていきます」(鳥居先生)

今後、探究活動を軸に、生徒が主役となる学校づくりを進めていく同校。教員もまた「ともによき世を創る」意識で、同僚性を発揮して取り組んでいくという。